沖縄→熊本 疎開体験を絵本に

普久原朝輝さんら「クリぞう」出版

「平和の大切さ語り継ぐ」

崇城大学生4人が協力

「慰霊の日」を前に

太平洋戦争中に沖縄から熊本県八代市に疎開した熊本市の普久原朝輝さん(88)らが6月、崇城大(同市)の学生の協力を得て、疎開体験を伝える「平和の絵本 クリぞう」(32ページ)を出版した。沖縄戦で旧日本軍の組織的戦闘が終結したとされる23日の「慰霊の日」を前に、普久原さんは「本を多くの人に届けたい」と話す。

那覇市出身の普久原さんは戦時中、沖縄から多くの住民が身を寄せた八代市の寺に母と妹と一緒に疎開した。警察官だった父は地元に残り、沖縄戦に巻き込まれて死亡。大黒柱を失った一家は、戦火に焼き尽くされた故郷に戻ることもできず、熊本で戦後を生きた。

普久原さんが絵本作りをするきっかけになったのは、那覇出身で特撮ヒーロードラマ「帰ってきたウルトラマン」を手がけた脚本家の上原正三さんとの出会い。上原さんを取り上げた新聞記事をきっかけに2019年4月に初めて会った2人はすぐに打ち解けた。上原さんは「若いクリエーターを育てたい」と語っていたが20年1月に82歳で死去し、普久原さんは遺志を継いで絵本出版を決めた。

高齢の普久原さんの願いを実現するため、義理の息子で大分県別府市で将棋教室を営む有田英樹さん(61)が、取材・執筆を担った。有田さんは普久原さんだけでなく、他の疎開体験者や疎開者を受け入れた熊本の人たちも取材し、ストーリーを練った。絵を担当した崇城大デザイン学科の学生4人は、普久原さんから直接話を聴き、体験記を読んで、戦時下の状況を想像しながら描いた。

こうして絵本は完成。疎開した子供たちが寂しく思っていた時に熊本の人たちが「アメリカはすぐ降参する」と言って励ましたことや、沖縄戦の被害の大きさを耳にした子供が他の疎開者を心配させないようにあえて黙っていたことなどが描かれている。有田さんは「平和の大切さを語り継ぐ一助にしてほしい」と話す。

熊日出版から発行し1100円。普久原さんが創立した一般社団法人「普久原未来のための事業団」のホームページから問い合わせができる。【中里顕】

完成した絵本を手にする有田さん＝有田さん提供

絵本を企画した普久原さん

2021年6月22日　毎日新聞　P.19